

# 「サピエンス全史」(1/数回) ユヴァル・ノア・ハラリ著

文明の構造と人類の幸福

柴田裕之 訳

河出書房新社 2016年9月初版発行

2020年4月79版発行



著者についての詳細は

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ユヴァル・ノア...>

ネットで「サピエンス全史」を検索しても、要約や図解が多数チェック出来ます。



(まんが版)

(上巻)

## 第1部 認知革命

- 第 1章 唯一生き延びた人類
- 第 2章 虚構が協力を可能にした
- 第 3章 狩猟採集民の豊かな暮らし
- 第 4章 史上最も危険な種

## 第2部 農業革命

- 第 5章 農耕がもたらした繁栄と悲劇
- 第 6章 神話による社会の拡大
- 第 7章 書記体系の発明
- 第 8章 想像上のヒエラルキーと差別

## 第3部 人類の統一

- 第 9章 統一へ向かう世界
- 第10章 最強の征服者、貨幣
- 第11章 グローバル化を進める帝国のビジョン

(下巻)

- 第12章 宗教という超人的秩序
- 第13章 歴史の必然と謎めいた選択

## 第4部 科学革命

- 第14章 無知の発見と近代科学の成立
- 第15章 科学と帝国の融合
- 第16章 拡大するパイという資本主義のマジック
- 第17章 産業の推進力
- 第18章 国家と市場経済がもたらした世界平和
- 第19章 文明は人間を幸福にしたのか
- 第20章 超ホモ・サピエンスの時代へ

## 歴史年表

- 135億年前 物質とエネルギーがあらわれる。物理現象の始まり。
- 45億年前 地球という惑星が形成される。
- 38億年前 有機体(生命)が出現する。生命学的現象の始まり。(ウイルスもこの時期に誕生)  
下記のURLをクリックすると、日本列島の誕生が説明されています。  
列島誕生 ジオ・ジャパン(1)引きちぎられた日本列島編 | NスペPlus (nhk.or.jp)  
(5,600万年前 - 3,400万年前、日本列島が大陸から分離・T. K.)
- 600万年前 ヒトとチンパンジーの最後の共通先祖。
- 250万年前 アフリカでホモ(ヒト)属が進化する。最初の石器。
- 200万年前 人類がアフリカ大陸からユーラシア大陸へ広がる。異なる人類種が進化する。
- 50万年前 ヨーロッパと中東でネアンデルタール人が進化する。
- 30万年前 火が日常的に使われる。
- 20万年前 東アフリカでホモ・サピエンスが進化する。
- 7万年前 認知革命が起こる。虚構の言語が出現する。歴史的現象の始まり。  
ホモ・サピエンスがアフリカ大陸の外へと広がる。
- 4万5千年前 ホモ・サピエンスがオーストラリア大陸に住みつ়。  
オーストラリアの大型動物が絶滅する。
- 3万年前 ネアンデルタール人が絶滅する
- 1万6千年前 ホモ・サピエンスがアメリカ大陸に住みつ়。アメリカ大陸の大型動物相が絶滅。  
(1万6千年前ころから日本列島にヒトが住みつ়。縄文時代の始まり。T. K.)

1万3千年前	ホモ・フロレンシスが絶滅する。ホモ・サピエンスが唯一生き残っている人類となる。
1万2千年前	農業革命が起こる。植物の栽培化と動物の家畜化。永続的な定住。
5,000年前	最初の王国、書記体系、貨幣、多神教。
4,250年前	最初の帝国—サルゴンのアッカド帝国(古代メソポタミア) (NETで検索出来ます)。
2,500年前	貨幣の発明—普遍的な貨幣。 ペルシャ帝国—「全人類のため」の普遍的な政治秩序。 インドの仏教—「衆生を苦しみから解放するため」の普遍的な真理。 (ギリシア哲学の興隆)
2,400年前	
2,000年前	中国の漢帝国。地中海のローマ帝国。キリスト教。
1,400年前	イスラム教。(1300年前仏教伝来)
500年前	科学革命が起こる。(420年前関ヶ原合戦で徳川体制確立) 人類は自らの無知を認め、空前の力を獲得し始める。 ヨーロッパ人がアメリカ大陸と各海洋を征服し始める。 地球全体が単一の歴史的領域となる。 資本主義が台頭する。
200年前	産業革命が起こる。(153年前1868年・明治元年) 家族とコミュニティが国家と市場にとって代わられる。 動植物の大規模な絶滅が起こる。
今日	人類が地球という惑星の境界を超越する。 核兵器が人類の生存を脅かす。(76年前・日本に原爆投下) 生物が自然選択でなく知的設計によって形作られることが次第に多くなる。
未来	知的設計が生命の基本原理となるか？ (iPS細胞の実用試験開始) ホモ・サピエンスが超人に取って代わられるか？ (DNAによるCOBIT-19の確認)

## 第1部 認知革命

### 第1章 唯一生き延びた人類

今からおよそ135億年前、いわゆる「ビッグバン」によって、物質、エネルギー、時間、空間が誕生した。私たちの宇宙の根源を成すこれらの要素の物語を物理学という。

およそ38億年前、地球と呼ばれる惑星の上で特定の分子が結合し、格別大きく入り組んだ構造体、すなわち有機体(生物・炭素を含む物質)を形作った。有機体の物語を「生物学」という。

そしておよそ7万年前、ホモ・サピエンスという種に属する生き物が、なおさらに精巧な構造体、すなわち文化を形成し始めた。そうした人間文化のその後の発展を「歴史」という。歴史の道筋は3つの重要な革命が決めた。約7万年前に歴史を始動させた認知革命、約1万2千年前に歴史の流れを加速させた農業革命、そしてわずか500年前に始まった科学革命だ。

・・・ホモ・サピエンスは1つの種に属している。歴史上最も厳重に守られてきた部類の秘密だ。ホモ・サピエンスは長年、自らを動物とは無縁の存在として見なしたがっていた。

#### 不真面目な秘密

私たちは自分たちが唯一の人類だとばかり思っている。「人類」という言葉の本当の意味は、「ホモ属に属する動物」であり、以前はホモ・サピエンス以外にもこの属に入る種は他に数多くあった。遠くない将来、私たちは、サピエンスでない人類と競い合う羽目になるかもしれない。

#### 思考力の代償

・・・大きな脳は、体に大きな消耗を強いる。ホモ・サピエンスでは、脳は体重の2~3%を占めるだけだが、じっとしているだけでも消費エネルギーの25%も使う。ヒト以外の霊長類の場合は8%しか必要としない

私たちは、大きな脳、道具の使用、優れた学習能力、複雑な社会構造を、大きな脳の強味だと思い込んでいる。だが、人類はまる200万年にわたってこれらすべての恩恵に浴しながらも、その間ずっと弱く、取るに足らない生き物でしかなかった。

私たちはつい最近まで、サバンナの負け組の一員だったため、自分の位置についての恐れと不安でいっぱい、そのためなおさら残忍で危険な存在となっている。多数の死傷者を出す戦争から生態系の大惨事に至るまで、歴史上の多くの災難は、このあまりに性急な飛躍の産物なのだ。

### 調理する動物

頂点への道のりにおける重大な一歩は、火を手なずけたことだった。…調理するようになったおかげで、人類は前よりも多くの種類の食物を食べたり、食事にかかる時間を減らしたりでき、小さな歯と短い腸で事足りるようになった。ほぼすべての動物の力は、自らの身体をよりどころにしている。…人類は火を手なずけた時、従順で潜在的に無限の力が制御できるようになった。

### 兄弟たちはどうなったか？

15万年前、私たちの先祖であるホモ・サピエンスはこの時点ではまだアフリカ大陸の一隅にほそぼそと暮らしていた。東アフリカのサピエンスはおよそ7万年前にアラビア半島に拡がり、短期間でユーラシア大陸全土を席卷した。ユーラシア大陸の大半に他の人類が定住していた。

彼らはどうなったか。2つの相反する説がある。「交雑説」、彼らと交わり一体化したとする説。もう一つは「交代説」。ホモ・サピエンスは他の人種とは相いれず、大量虐殺さえしたかもしれないとする説。…中東とヨーロッパの現代人に特有のDNAの内、1～4%がネアンデルタール人のDNAだった。…現代のメラネシア人とオーストラリア先住民に特有のDNAの内、最大6%が、デニソワ人のDNAであることが立証された。

(ネアンデルタール人もデニソワ人もどこに住んでいたか、ウキペディアで検索できます。T.K.)

およそ5万年前、ホモ・サピエンス、ネアンデルタール人、デニソワ人は互いに交合出来ない別べつの種として分岐した。彼らがなぜ消えてしまったのか。ホモサピエンスによって絶滅に追い込まれたらしい。…サピエンスの方が優れた技術と社会的技能のおかげで、狩猟採集が得意だったため、子孫を残し、拡大していった。才覚で劣るネアンデルタール人は食べて行くのが次第に難しくなった。

…別の可能性として、資源をめぐる競争が高じて暴力や大量虐殺につながったことも考えられる。寛容さはサピエンスのトレードマークではない。近代や現代にも、肌の色や方言、あるいは宗教の些細な違いから、サピエンスの一集団が別の集団を根絶しにかかることが繰り返されてきた。

過去1万年間に、ホモ・サピエンスは唯一の人類種であることにすっかり慣れてしまったので、私たちはそれ以外の可能性について思いめぐらせるのが難しい。

サピエンスの成功の秘密は何だったのか？ 私たちはどうやって他の人類種をすべて忘却のかなたへ追いやったのか？ なぜ強靱で、大きな脳を持ち、寒さに強いネアンデルタール人たちでさえ、私たちの猛攻撃を生き延びられなかったか？

最も有力な答えは、その議論を可能にしているものに他ならない。ホモ・サピエンスが世界を征服できたのは、何よりもその比類なき言語のおかげではなからうか。

## 第2章 虚構が協力を可能にした

前章で見た通り、サピエンスは、15万年前にすでに東アフリカで暮らしていたものの地球上のそれ以外の場所に侵入していた他の人類種を絶滅に追い込み始めたのは、7万年ほど前になってからのことだった。それまでの8万年間、太古のサピエンスは外観が私たちそっくりで、脳も同じくらい大きかったとはいえ、他の人類に対して、これといった強みを持たず、とくに精巧な道具も作らず、格別な偉業は何一つ達成しなかった。それどころか、サピエンスとネアンデルタール人との間の、証拠が残っている最古の遭遇ではネアンデルタール人が勝利した。サピエンスの複数の集団が、ネアンデルタール人の縄張りだったレヴァント地方(地中海東岸)に移り住んだが、ゆるぎない足場は築けなかった。ネアンデルタール人は中東に君臨し続けた。

だが、その後、およそ7万年前からホモ・サピエンスは非常に特殊なことを始めた。サピエンスの複数の生活集団が再びアフリカ大陸を離れ、ネアンデルタール人をはじめ、他の人類をすべて中東から追い払ったばかりどころか、地球上から一掃してしまった。

・・・4万5千年ほど前、彼らはどうにかして大海原を渡り、オーストラリア大陸に上陸した。約7万年前から、3万年かけて、人類は舟やランプ、弓矢、縫い針を発明した。芸術と読んでも差支えない作品もこの時代にさかのぼるし、宗教や交易、社会的階層化の最初の明白な証拠にしても同じだ。

ほとんどの研究者は、これらの前例のない偉業は、サピエンスの認知的能力に起こった革命の産物だと考えている。彼らは私たちと同じくらい高い知能を持ち、創造的で繊細だったと研究者たちはいう。私たちの知っていることの一切を彼らに説明でき、また、彼らは自分たちの世界観を私たちに教えられるはずだ。

このように7万年前から3万年前にかけて見られた、新しい思考と意思疎通の方法の登場のことを「認知革命」と呼ぶ。その原因はなにだったか。・・・たまたま遺伝子の突然変異が起こり、サピエンスの脳内の配線が変わり、それまでにない形で考えたり、まったく新しい種類の言語を使って意思疎通をすることが可能になった。

それはこの世で初の言語ではなかった。どんな動物でも、何かしらの言語を持っている。ミツバチやアリのような昆虫でさえ、複雑なやり方で意思を疎通させることを知っている。・・・私たちの言語のいったいどこがそれほど特別なのか。最もありふれた答えは、私たちの言語は驚くほど柔軟であるということだ。・・・これとは別の説もある。伝えるべき情報の内で最も重要なのはライオンなど他の動物やものではなく、人間についてのものであり、うわさ話のために発達したのだそうだ。ホモ・サピエンスは本来、社会的な動物であるという。

数十人の人の刻々と変化する関係を追跡するため手に入れて保存しなければならない情報の量は信じがたいほど多い。・・・誰が信頼できるかについての確かな情報があれば、小さな集団は大きな集団へと拡張でき、より緊密でより精緻な種類の協力関係を築きあげられた。

うわさ話はたいがい、悪行を話題とする。うわさ好きな人というのは、すなわちずるをする人たちやたかり屋について社会に知らせ、それによって社会をそうした輩から守るジャーナリストなのだ。

私たちの言語が持つ比類ない特長は、まったく存在しないものについての情報を伝達する能力だ。ありとあらゆる種類の存在について話す能力があるのはサピエンスだけなのだ。

伝説や神話、神々、宗教は認知革命に伴って初めて現れた。それまで「気をつけろ！ライオンがきた！」と言える動物や人類種は多くいた。だが、ホモ・サピエンスは認知革命のおかげで、「ライオンはわが部族の守護神だ」と言う能力を獲得した。虚構、架空の物事について語る能力こそが、サピエンスの言語の特徴として異彩を放っている。

私たちは集団でそんなことができるようになった。サピエンスは無数の赤の他人と著しく柔軟な形で協力できる。だから、サピエンスが世界を支配することが出来た。

**プジョーの伝説(フランス自動車メーカー:プジョーのマークはライオン人間)**  
(ドイツのシュターデル洞窟で発見されたライオン人間像が原型という。)



・・・研究者はチンパンジーの集団の長期に及ぶ戦争状態を詳細に記録してきた。一つの集団が、近隣の群れの成員のほとんどを計画的に殺害する「大量虐殺」活動さえ、1件報告されている。同様のパターンが、太古のホモ・サピエンスも含めた初期の人類の社会生活にも、おそらく浸透していただろう。人類にも社会的な本能があり、そのおかげで私たちの先祖は親密な関係や、ヒエラルキー(階級)を形成してきた。

認知革命の結果、ホモ・サピエンスはうわさ話の助けを得て、より大きくて安定した集団を形成した。

いったん、150人という限界値を越えると、もう物事はそう進まなくなる。ではホモ・サピエンスはどうやってこの重大な限界を乗り越え、都市や帝国を最終的に築いたのだろうか。その秘密はおそらく、虚構の登場にある。膨大な数の見知らぬ人どうしも、共通の神話を信じることによって首尾よく協力できるのだ。

近代国家にせよ、中世の教会組織にせよ、太古の部族にせよ、人間の大規模な協力体制はなにであれ、人々の集合的想像の中のみ存在する共通の神話に根差している。

企業の世界を例に取ろう。現代のビジネスマンや法律家は、じつは強力な魔術師なのだ。彼らと部族社会の呪術師との最大の違いは、現代の法律家の方が、はるかに奇妙奇天烈な物語をを方ることにある。その格好の例がプジョーの伝説だろう。

プジョーはシュターデル洞窟からわずか300Kmのヴァランティニエの村で起業され、現在世界で20万人の従業員をもち、年間150万台以上生産し、550億ユーロの収益を挙げている。私たちはどういう意味でプジョー社が存在していると言えるだろうか。製造された自動車がプジョー社ではない。世界からプジョーの車が全部無くなっても、従業員や製造ライン、オフィスが無くなってもプジョー社は無くならない。

これはプジョー社が不死身だとか、不滅というわけではない。プジョー社は物理的世界とは本質的に結びついてはいない。プジョー社は私たちの集合的想像が生み出した虚構だ。法律家はこれを「法的虚構(法的擬制)」と呼ぶ。それは指で指し示すことは出来ない。だが、法的な主体(法人)としては確かに存在する。

プジョーは法律的虚構の内でも、「有限責任会社」という特定の部類に入る。このような会社の背景にある考え方は、人類による独創的発明のうちでも指折りのものだ。

13世紀のフランスでは、事業主は事業に関する責任はすべて本人に負わせられていた。事業に失敗したら、全財産、わが子を奴隷として売ってまでして、償わなければならなかった。もし、プジョーの創業が13世紀だったら、自分の事業を始めるのに二の足を踏んだだろう。

では、どうして創業者アルマン・プジョーは会社のプジョーを生み出したのか。そのやり方は、聖職者や魔術師が歴史を通して神や悪霊を生み出してきたのと、ほぼ同じやり方で、物語を語ること、人々を説得してその物語を信じさせることにかかっていた。

プジョーの決定的に重要な物語は、フランス議会によって定められたフランスの法典だった。公認の法律家が正規の礼拝手順を踏み、儀式をおこない、見事に装飾された書類に必要な呪文や宣誓をすべて書き込み、一番下に凝った署名を書き添えれば、あら不思議—新しい会社が法人化された。

効力を持つような物語を楽ではない。難しいのは物語を語ること自体ではなく、あらゆる人を納得させ、誰からも信じてもらうことだ。

プジョーのような虚構はたんに存在するだけでなく歴大な力を蓄積する。この物語のネットワークを通して人々が生み出す種類のものは、学究の世界では「虚構」「社会的構成概念」「想像上の現実」などとして知られている。想像上の現実は嘘とは違う。サバンナモンキーやチンパンジーも嘘をつくことが観察されている。

想像上の現実は嘘と違い、誰もがその存在を信じているもので、その共有概念が存在する限り、その想像上の現実が社会の中で力を振るい続ける。魔術師のうちにはペテン師もいるがほとんどは神や魔物の存在を本当に信じている。百万長者の大半は、お金や「有限責任会社」の存在を信じている。

サピエンスは認知革命以来ずっと二重の現実の中に暮らしてきた。時が流れるうちに、想像上の現実が果てしなく力を増し、今日では現実の存在が想像上の存在物があってこそになっている。

### ゲノムを迂回する

言葉を使って想像上の現実を生み出す能力のおかげで、大勢の見知らぬ人どうしが効果的に協力できるようになった。人間どうしの大規模な協力は神話に基づいているので、人々の協力の仕方は、その神話を変えること、別の物語を語る事によって、変更可能なのだ。

認知革命以来、ホモ・サピエンスは必要に応じて迅速に振る舞いを改めることが可能になった。

他の社会的な動物の行動は、遺伝子によっておおむね決まっている。DNAは専制君主ではない。太古の人類は革命を一切起こさなかった。社会的パターンにおける変化や、技術の発明、新しい環境への移住は、文化に主導されているのではなく、遺伝子の突然変異や環境からの圧力によって起こった。だからこそ、人類はそれらを成し遂げるのに何十万年もかかった。

サピエンスは認知革命以来、自らの振る舞いを素早く変えられるようになり、遺伝子や環境の変化を全く必要とせず、新しい行動を後の世代へと伝えていった。

たとえば、1900年生まれ、100歳の天寿を全うしたベルリンの女性を想像してほしい。彼女は子供時代をウィルヘルム二世のホーエンツォレルン帝国で過ごし、成人してからはワイマール共和国、ナチスの第三帝国、共産主義の東ドイツで暮らし、再統一された民主主義のドイツ市民として生涯を終えた。これこそがサピエンスの成功のカギだった。

サピエンスの遺跡からは黒曜石の交易があったことが分かるが、ネアンデルタール人の遺跡からは交易の痕跡が見られない。交易は、虚構の基盤を必要としない、実際的な活動に見える。交易を行う他の動物は見られない。サピエンスの交易ネットワークはすべて虚構に基づいていた。交易は相互の信頼抜きでは存在しえない。

### 認知革命で何が起こったか

新しい能力	より広範な結果
ホモ・サピエンスを取り巻く世界について	ライオンを避けたり、パイソンを狩ったり
以前よりも大量の情報を伝える能力	するといった、複雑な行動の計画立案と遂行
サピエンスの社会的関係について、	最大150人から成る、以前より大きく、
以前よりも大量の情報を伝える能力	まとまりのある集団
部族の精霊や国家、有限責任会社、	a. 非常に多数の見知らぬ人どうしの協力
人権といった、現実には存在しない	b. 社会的行動の迅速な革新
ものについての情報を伝える能力	

### 歴史と生物学

サピエンスが発明した想像上の現実の計り知れない多様性と、そこから生じた行動パターンの多様性はともに、私たちが「文化」と呼ぶものの主要な構成要素だ。いったん登場した文化は、けっして変化と発展をやめなかった。この止めようもない変化のことを「歴史」と呼ぶ。したがって、認知革命は歴史が生物学から独立を宣言した時点だ。

これは、ホモ・サピエンスと人類の文化が生物学の法則を免れるようになったということではない。私たちの社会は、ネアンデルタール人やチンパンジーの社会と同じ基本構成要素で構築されており、感覚、情緒、家族の絆といった、これらの要素を詳しく調べれば、調べるほど、私たちと他の霊長類の違いは縮まっていく。

認知革命以降の生物学と歴史の関係をまとめると、以下のようになる。

- 生物学的特性は、ホモ・サピエンスの行動と能力の基本的限界を定める。歴史はすべてこのように定められた生物学的特性の領域の境界内(アリーナ)で発生する。
- この領域(アリーナ)は途方もなく広いので、サピエンスは多様なゲームをすることができる。サピエンスは虚構を発明する能力のおかげで、しだいに複雑なゲームを編み出し、各世代がそれをさらに発展させ、練り上げる。
- サピエンスがどう振る舞うかを理解するためには、彼らの行動の歴史的進化を記述しなければならない。

## 第3章 狩猟採集民の豊かな暮らし

進化心理学の分野では、私たちの現在の社会的特徴や心理的特徴の多くは、農耕以前の長い狩猟採集民だった時代に形成されたといわれる。私たちの脳と心は今日でさえ、狩猟採集生活に適応していると言われる。ほとんど身体のためにならないのになぜ人は高カロリーの食品をたらふく食べるのか？この「大食い遺伝子」説は広く受け入れられている。

進化心理学者によれば、古代の狩猟採集民の集団は、一夫一婦制の男女を中心とする核家族から成っていたわけではなく、彼らは私有財産も、一夫一婦制の関係も持たず、各男性には父権さえない原始共同体で暮らしていた。そのような集団では、女性は同時に複数の男性(および女性と性的関係を持ち、親密な絆を形成することが可能で、集団の成人全員で子育てに当たっていた。

この「古代コミュン」説の支持者によれば、大人も子供も苦しむ多種多様な心理的コンプレックスはもとより、現代の結婚生活の特徴である頻繁な不倫や高い離婚率はみな、私たちが自分の生物学的ソフトウェアとは相容れない、核家族と一夫一婦の関係の中で生きるように強制された結果だという。

考古学的な証拠は主に骨の化石と石器から成る。木や竹、皮などの最も朽ちやすい材料で作られた人工物は特殊な条件のもとでしか残らない。石器時代はより正確には「木器時代」と呼ぶべきだろう。・・・人工遺物に頼ると、古代の狩猟採集生活の説明が歪んでしまう。

### 原初の豊かな社会

生活集団の成員は、お互いにごく親しく知っており、生涯を通して友人や親族に囲まれていた。近隣の集団は、おそらく資源を求めて競い合い、戦うことさえあっただろうが、友好的な接触を持っていた。成員をやり取りし、一緒に狩りをし、希少なぜいたく品を交換し、政治的同盟を固め、宗教的な祝祭を執り行っていた。

サピエンスの集団のほとんどは、食べ物を探してあちこちへと歩ながら暮らしていた。彼らの動きは季節の変化や、動物の移動、植物の生長周期の影響を受けていた。

集団は自然災害や暴力的な争い、人口の負荷、カリスマ的なリーダーの先導によって、時折縄張りの外に出て新しい土地を探索した。狩猟採集民の集団が40年ごとに2つに分裂し、東アフリカから中国までおよそ1万年で到達しただろう。

サピエンスは食べ物と材料を採集するだけにとどまらず、知識も漁りまわった。生き延びるためには、縄張りの詳しい地図を頭に入れておくことが必要だった。

平均的な狩猟採集民は、現代に生きる子孫の大半よりも、直近の環境について、幅広く、深く、多様な知識を持っていた。

平均的なサピエンスの脳の大きさは狩猟採集時代以降、じつは縮小したという証拠がある。人々は生き延びるために、次第に他者の技能にたよるようになり、「愚か者のニッチ」が新たに開けた。

今日、豊かな社会の人は、毎週平均して40～45時間働き、発展途上国の人々は毎週60時間、あるいは80時間も働くのに対し、今日、カラハリ砂漠のような最も過酷な生息環境で暮らす狩猟採集民でも、平均すると週に35～45時間しか働かない。狩猟採集民は小さな集団で動き回っていたので、感染症は蔓延のしようがなかった。

健康に良く多様な食物、比較的短い労働時間、感染症の少なさを考え合わせた、多くの専門家は農耕以前の狩猟採集社会を「原初の豊かな社会」と定義するに至った。とはいえ、これらの古代人の生活を理想化したら、それは誤りになる。確かに、農耕社会や工業社会の人の大半よりも良い生活を送ってはいたが、彼らの世界は厳しく、情け容赦のない場所になることもあった。

1960年代までパラグアイの密林に暮らしていた狩猟採集民のアチェ族は暗い側面を持っていた。集団にとって貴重な成員が無くなると、小さな女の子を殺して埋葬するのが常だった。アチェ族の老女が集団の足手まといになると、若い男性が老女の後ろに忍び寄り、頭に斧を降りおろして殺害するのだった。

### 口を利く死者の霊

多くの学者は、古代の狩猟採集民の間では、一般にアニミズムが信じられていたと考える。ほぼあらゆる場所や動植物、自然現象には意識と感情があり、人間と直接思いを通わせられるとい信念だ。アニミズムの信奉者は人間と他の存在との間には壁はないと信じている。アニミズムは一つの具体的な宗教ではない。何千という宗教、カルトの総称だ。

### 平和か戦争か

最後に、狩猟採集民の社会における戦いの役割という、厄介な疑問がある。古代の狩猟採集社会は平和な楽園だと思い、戦争や暴力は農業革命に伴って、人々が私有財産を蓄え始めたときに、初めて現れたと主張する学者がいる。一方、古代の狩猟採集民の世界は並外れて残忍で暴力的だったと断言する学者もいる。どちらの考え方も空中楼阁にすぎず、乏しい考古学的遺物と、現代の狩猟採集民の人類学的観察という細かい糸でかろうじて大地につなぎ止められているだけだ。

彼らの見せる暴力の度合いもさまざまだっただろう。平和や平穏を享受した場所や時代もあれば、残忍な争いで引き裂かれた場所や時期もあった。

## 沈黙の帳

古代人狩猟採集民の生活の全体像を復元するのは難しい。例外は、数片の化石化した骨や、一握りの石器ぐらいで、どれほど綿密に研究したところで、それらは何も語ってくれない。この沈黙の帳が何万年もの歴史を覆い隠している。その長い年月には、戦争や革命、熱狂的な宗教運動が起こったり、深遠な哲学理論や比類ない芸術の傑作が現れたりした可能性は十分ある。・・・沈黙の帳は余りにも厚く、どんなことが起こったかどうかすら私たちには確かではなく、詳細に記述することなど望むべきもない。

しかし、実際には彼らは重要なことを数多く行った。彼らは私たちの周りの世界を一変させた。シベリアのツンドラ、オーストラリアの中央部の砂漠、アマゾンの熱帯多雨林には狩猟採集民が私たちよりも先に立ち入っている。

## 第4章 史上最も危険な種

認知革命以前には、どの人類種もアフロ・ユーラシア大陸で暮らしていた。彼らはまだ大海原に乗り出すことは出来ず、アメリカとオーストラリア、日本、台湾、マダガスカル、ニュージーランド、ハワイにはまったく到達していなかった。・・・海という障壁は人類だけでなく、他の動植物の多くが「外界」に行くのを妨げていた。

地球という惑星は幾つかの別個の生態系に分かれていた。ホモ・サピエンスが今まさにこれに終止符を打とうとしていた。サピエンスは認知革命の後、「外界」に移住するのに必要な技術や組織力、先見の明さえも獲得した。約4万5千年前の、オーストラリアへの移住は、どうして出来たかを説明するのに専門家は窮している。

人類によるオーストラリア大陸への初の旅は歴史上屈指の重要な出来事で、コロンブスのアメリカへの航海やアポロ11号による月面到着に匹敵する。・・・狩猟採集民が初めてオーストラリア大陸に足を踏み入れた瞬間は、ホモ・サピエンスが特定の陸塊で食物連鎖の頂点にたった瞬間であり、それ以降、人類は地球という惑星の歴史上で最も危険な種となった。

有袋類の哺乳動物はオーストラリアでは我が物顔に振る舞っていた。その後数千年の内に体重が50kg以上の動物の24種のうち23種が絶滅した。

### 告発の通り有罪

気候の気まぐれな変動に責めを負わせて私たちの種の無実のを晴らそうとする学者もいる。とはいえ、ホモ・サピエンスが完全に潔白だとは信じがたい。オーストラリア大陸の大型動物の絶滅に私たちの祖先が関与していたことを示す証拠が3つある。

第一に、オーストラリア大陸の気候はおよそ4万5千年前に変化したとはいえ、それはあまり著しい変動ではなかった。過去100万年間に、平均すると10万年ごとに氷河期があった。巨大なディプロドン<sup>1</sup>は150万年以上前に現れ、4万5千年前に消えてしまったのか。

ウィキペディア:



頭胴長約3.3m、頭骨長約70cm、肩高約2m、  
体重約2.8tと大型の植物食哺乳類  
ディプロドン(約160万 ~ 約4万6,000年前)

サピエンスがオーストラリア大陸に到達した4万5千年前に、オーストラリア大陸の大型動物相の9割以上が姿を消した。これは偶然とはいええない。

第二に、気候変動が大規模な絶滅を引き起こす時はたいてい、陸上動物と同様に海洋動物にも大きな被害が出る。だが、4万5千年前に海洋動物相が著しく消滅したという証拠はない。

第三に、ニュージーランドにおける最初のサピエンスの移住者であるマオリ人は、800年ほど前に、この島々にやってきた。その後の200年の内に、地元の大型動物相の大半は、全鳥類の6割とともに絶滅した。

### オオナマケモノの最後

オーストラリア大陸の大型動物相の絶滅はおそらく、ホモ・サピエンスがこの惑星に残した最初の重大な痕跡だった。次の舞台はアメリカ大陸だった。マンモス、マストドン、クマほど



の大きさのげっ歯類、馬やラクダ、巨大なライオン、体重が最大で8トン、伸長が6mになるオオナマケモノも消滅した。

## ノアの方舟

サピエンス移住の第一波は生態学的惨事をもたらし、動物界を見舞った悲劇のうちでも、とりわけ規模が大きく、短時間で起こった。最大の被害者は毛皮で覆われた大型の動物たちだった。認知革命の頃には体重が50kgを越す大型の陸上哺乳動物が200属生息していたが、農業革命の頃には100属ほどしか残っていなかった。

ホモ・サピエンスは、車輪や書記、鉄器を発明するはるか以前に、地球の大型動物のおよそ半数を絶滅に追い込んだ。

大西洋やインド洋、北極海、地中海に散らばる何千もの島々のほぼすべてで大型動物の絶滅が起こった。

ただ、ほんのわずかながら、近代まで人類に気付かれずにこられた絶海の孤島があり、そこでは、固有の動物相が無傷で残っていた。ガラパゴス諸島では19世紀になるまで人類が住んでいなかったため、ゾウガメなど、独特の動物が生き延びてきた。ゾウガメは古代のディプロドンと同様に人間を全く恐れない。

陸上の大型動物と違って、海の大動物は、認知革命と農業革命の害はあまり受けずにすんだ。だが、産業公害と、人間による海洋資源の濫用のせいで、いまやその多くが絶滅寸前になっている。

もし、このままでいけば、世界の大型生物のうち、人類の殺到という大洪水を唯一生き延びるのは人類そのものと、ノアの方舟を漕ぐ奴隷の役割を果たす家畜だけということになるだろう。

ネアンデルタール人についてのTV番組がありました。  
2021年2月13日(土)19:00~19:45...  
NHK教育TV「ネアンデルタール人 真の姿に迫る」  
(再放送の機会がありましたら見てください。)



サピエンスの言語能力の本質の一つとして、虚構(Fiction, Virtual)を語ることでであるとすると、神話や神々、宗教、理想、善意の対極にはフェイクニュース、詐欺、偽証、策略、狂信、妄想、悪意があり、それらもこの世からなくなならない。経済恐慌も、暴動も、虐殺も、戦争もそれらの延長線上にあるとしたら、私たちはどうすればいいのか？  
現代社会がIT技術(デジタル情報)によって、バーチャル(Virtual・虚構)が拡大してリアル(Real・現実)の影が薄くなっていく。

一般の人にはウィルスは目には見えない、バーチャルな事象にも思える。  
しかし、現実存在する。目に見えないものが世界を動かしている。

最近起きた虚構が破滅した事例は、金融工学が作り出した金融商品の破滅でリーマンショックとして世界に大きな損失をもたらした。

また、日本国憲法の改正をめぐる議論は、物語を作り変えるかどうかの議論といえる。

ジョン・レノン、オノ・ヨーコのイマジンはすべてが虚構だと謳う。すべてがイメージだという。般若心経はすべてが空だという。旧約聖書も同じようなことをいっている。

T.K.